

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古代フランス語 "aler le chemin" について
Author(s)	原野, 昇
Citation	ニダバ , 3 : 33 - 40
Issue Date	1974-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044706">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044706</a>
Right	
Relation	



## 古代フランス語 “aler le chemin” について

原 野 昇

### §0 はじめに

古代フランス語のテキストを読んでいると次のような表現によく出合う。

- (1) Quant ce oïrent li chevalier gentil  
Que il *iront* a Blaives *lor chemin*,  
Tel joie en orenet onques greingnor ne vi.  
(*Ami.* 1110-1113)
- (2) Droiz vers Riviers en *iroiz le rivaige*,  
(*Ibid.* 1868)
- (3) Vers la mer *vet* Tristran *sa voie*  
(*Trist.* 2929)
- (4) Tant *chevalcherent e veies e chemins*  
(*Rol.* 405)
- (5) Puis sunt muntet, par grant vertut *chevalchent*  
*Cez veiez lunges e cez chemins mult larges*  
(*Ibid.* 2851-52)
- (6) Des or *chevauchent le grant chemin plenier*  
(*Ami.* 3297)
- (7) Tote *une viés voie herbeuse cevaugoit*  
(*Auc.* XXIV 12)
- (8) et les escargaites de le vile *venoient tote une rue*  
(*Ibid.* XLV 24)

(9) *Je m'en venoie la rue contremont*

(*Ami.* 873)

上の例は、すべて場所の移動を表わす動詞 (*aler, chevauchier, venir* など) と、その動作がその場所を通過して行われる通過場所を表わす補語 (*chemin, voie, rue* など) とから成っており、しかもその補語は何らの前置詞も介さずに動詞に直接置かれている場合である。

このような構文はどう考えたらいいのであろうか。特にこれら通過場所を表わす補語と動詞との関係は、

- 1) 他動詞と直接目的補語の関係か
- 2) 自動詞と状況補語 (副詞) の関係

なのであろうか。

実はこの問題はたちまち、他動詞あるいは自動詞とは何か、その区別の基準はどこにあるのかという動詞の問題、また他方、ここでいう補語の性格、機能というラテン語以来の格の問題を含めた名詞の問題、という大きな問題に発展していくのみでなく、それらに付随する種々の問題、例えば、複合時制における助動詞 (*avoir* および *estre*)、の問題などと複雑に関連しあっていることがわかる。そこで詳細にわたる調査は後日にまわし、以下は上の問題に関するヒントを得るための予備調査である。扱われたテキストは次のものである。

1. *La vie de Saint Alexis*, éd. Storey (TLF), 1968  
10世紀中頃作 625号 (略号 *Alex.*)
2. *La Chanson de Roland*, éd. Moignet (Bordas), 1969  
1100年頃作 4002行 (略号 *Rol.*)
3. *Bérout: Le Roman de Tristan*, éd. Muret (CFMA), 1947  
1170~1191頃作 4485行 (略号 *Trist.*)
4. *Ami et Amile*, éd. Dembowski (CFMA), 1969  
12世紀末~13世紀初 3504行 (略号 *Ami.*)
5. *Aucassin et Niolette*, éd. Roques (CFMA), 1965  
13世紀前半作 約1760行 (散文部分も韻文行数に数えなおして) (略号 *Auc.*)
6. *Guillaume de Lorris: Le Roman de la Rose*, éd. Lecoy (CFMA), 1968  
1225~1230頃作 4028行 (略号 *Rose.*)

## §1 aler le chemin と aler par le chemin

冒頭にあげた9つの例は、現代フランス語ではたいていが *par* などの前置詞をつけて表現されるものである。例えば、(4)、(5)に対する校訂者 G. Moignet の現代訳語では、次のようになっている。

(4') Ils chevauchèrent tant *par* voies et *par* chemins

(5') Puis ils se sont mis en selle et chevauchent à grande allure *par* les longues routes et larges chemins.

このように通過場所を *par* を付けて表現する例は古代フランス語にも見られる。

(10) *Vait par les rues* dunt il ja bien fut cointe  
(*Alex.* 212)

(11) *Qui vont mangant par le chemin*  
(*Trist.* 3639)

(12) *Fors s'en issi, par le bois vert*  
(*Ibid.* 1521)

(13) <<Qui sont ces gens qui *viennent par ces rues?* >>  
(*Ami.* 1982)

(14) *Si vit venir Ami par la chaucie*  
(*Ibid.* 1342)

(15) *et quant tu iras par les rues,*  
*gart que tu soies coutumiers*  
(*Rose.* 2090)

すなわち古代フランス語には、通過場所を表わすのに、前置詞 *par* (その他の前置詞 *en*, *selonc* などここでは考慮に入れない) を用いて行方場合と、*par* なしで直接に表現する場合とがあるということになる。その場合、*par* がある表現とない表現とはニュアンスの相異があることは当然の事である。6つの作品における用例数は下の如くである。

(表1)	Alex.	Rol.	Trist.	Ami.	Auc.	Rose.	計
<i>par</i> なし	0	10	6	34	7	0	57
<i>par</i> あり	4	9	11	4	7	3	38
計	4	19	17	38	14	3	95

作品の長さ(行数)、内容、時代、その他の条件があるので上の表からは何らの結論も引き出し得ないが、*Ami.*にこのような表現が目立つことは事実である。時代がさがるので上の表に入れていないが、*Villon*の全作品(約5600行)中で *par* のあるなしを含めてそれらしい表現は、

*Et y courust toute ma terre*

(*Villon*, T 762, CFMA 2, p.36)

の1例のみである。

上の表には色々な動詞が含まれているが、動詞によって、*par* をもった例のみしかみられないもの、またその反対のものもあるので個々の動詞についてみると下のようになる。

	<i>par</i> なし	<i>par</i> あり
aler	3	17
s'en aler		3
avalier	5	1
s'avalier	2	
chevaucher	6	3
venir	2	7
monter	7	1
errer	2	1
s'en fuir	1	1
passer	21	
s'en passer		1
descendre		1
corre		2

torner	5
aloignier	1
puier	1
retorner	1

57

38

上の動詞とともに用いられている通過場所を表わす名詞は次のものである。

a) par なし: chemin, voie, rue, sentier, sente, val, mont, riviere, vivage, fossé, port, porte, puis, roche, terre, cité, borg, ville, contree, regnés, chastiax, manandie, donjou, degré, mer, 個有名詞(地名、川の名)

b) par あり: chemin, chaucie, rue, sente, charriere, valee, bois, boschage, camp, oz, vergier, forest, terre, païs, fosse, mer, degré, 個有名詞(地名)

先の表では、上のような名詞と一緒に用いられていても、場所の移動を示さない動詞は考慮に入れてない。例えば

*Tozent lur veies e les chemins plus granz*  
(*RoL.* 2464)

(=ils leur coupe les voies et les chemins les plus larges.)

その他、*acoillir*, *prendre*, *tenir*, *laisser*なども省いてある。  
*traverser*は場所の移動を表わすが、常に前置詞なしで用いられ、現代語でも同様なのでこれも省いた。(例 *La Blanche Lande out traversee. Trist.* 2653)  
*Passer*はparなしの例のみであるが、*s'en passer par* (*Ami.* 2475)の例が1例あるので入れた。

その他、*celle part* (*Auc.* X.32, etc.)や、*guel part* (*Auc.* XVII.6. etc.)の場合は、*la*(=*là*)や*ou*(=*Où*)などの場合と同様省いてある。また次のように *par mi(e)*と一緒に用いられているものも除外した。

Contant vont *par mie* le chemin

(*Trist.* 3524)

このようにして得られた表 2 から云えることは、同じように場所の移動を表わす動詞の中にも

- (1) つねに *par* とともに用いられるもの
- (2) 前置詞なしで用いられるもの
- (3) *par* をつけたり、つけなかったりして用いられるもの。

の 3 種類があるということがわかる。そして(3)の中でも *par* なしに用いられる方が多いもの (*monter*) と、*par* と一緒に用いられる方が多いもの (*aler*, *venir* など) とがあり、その間種々の度合いのものがある。

## § 2 他動詞性、自動詞性

§ 1 でみた動詞のうち、つねにあるいはほとんどつねに *par* なしに用いられる動詞は他動詞性が強く、その反対に *par* をとるものは自動詞性が強いと一応云える。

後者に属する動詞が *par* なしで用いられている場合には、通過場所を示す名詞は状況補語 (副詞) 的印象を与え、前者の動詞が *par* なしで用いられている場合には、上表から除外されている *traverser* あるいは場所の移動を示さないが *prendre* などの動詞 + 直接目的補語の構文を連想させる。そして複合時制においては、過去分詞が一致している場合さえある。

Quant li baron orent la mer *passee*

(*Ami.* 3491)

Fuiant s'en vont, Foincherres ont *passee*

(*Ibid.* 408)

Droit a sa voie *tornee*

(*Ibid.* 403)

Par Lombardie ont lor voie *tornee*

(*Ibid.* 3492)

以上の例にみられる *passer*, *torner* はともに他動詞性の強い動詞であるが *Ky.* *Nyrop* は、*aler* が一致している例を 3 例あげている。その 1 つを下に引用しておく。

Kar quant il ot *alees* Tretutes les contrees

(*Grammaire historique de la langue française* t.VI, p. 172 s.)

その他 Tobler-Lommatzsch にも多くの用例があげてある。( *Altfranzösisches Wörterbuch* t.I. 293-294 ) また、次の monter の例では、前置詞なしで用いられているにもかかわらず、過去分詞は主語に一致している。

Nicolete o le vis cler

fu *montee* le fossé, ( *Auc.* XVll. 2 )

G. Cohen の現代訳語では

Nicolette au brillant visage

était *montée* au sommet du fossé

( *Aucassin et Nicolette*, Champion, 1968, p36 )

となっている。すなわち、ここでの *montee* は、明らかに *fossé* とよりも主語 Nicolette とより密接な関係にあるということがわかる。云い換えれば、前置詞の有無か、いわゆる他動詞と自動詞を区別する決定的基準ではないと云うことにもなる。そのことは代名動詞 ( *s'avalier*, *s'en fuir* ) にも前置詞なしの例があるということからもわかる。(表2参照) L.Kukenheim は上のような例にゲルマン語の影響を認めている。

( *Grammaire historique de la langue française, Les syntagmes*,  
Leiden, 1968, p.65 )

### §3 むすび

以上のような問題に対し、従来の学者はどのような見解をとっているであろうか。Tobler-Lommatzsch は辞書という制約があるかも知れないが、はっきり他動詞として(例えば *aler* t.I 293) *aler le chemin* に類する例を扱っている

Nyrop は自動詞 ( *verbes subjectifs* ) の他動詞 ( *verbes objectifs* ) への移行として説明している。( *Grammaire historique de la langue française* t.VI p.172.etc. ) 同種の説明は A. Darmesteter にもみられる。( *Cours de grammaire historique de la langue française* t.IV p.98.etc. )

F. Brunot にも自動詞から他動詞への移行の指摘はあるが、( *La pensée es la langue* p.311s.etc ) そこでは *aler le. chemin* の例は取扱われていない。

J. Anglade では、名詞の働きとして、

Un substantif peut être employé comme complément circonstanciel sans préposition avec des verbes de mouvement (verbes neutres) (*Grammaire élémentaire de l'ancien français*, p.170)

として扱われている。同種の説明は先の Nyrop にもある。すなわち目的格 (cas régime) の働きとして、“Le lieu où se passe une action, le chemin par lequel on se meut” (前掲書 t. V. p.131) を表わすとしている。

L. Foulet: *Petite syntaxe de l'ancien français* では、Cas régime exprimant le complément circonstanciel の項でも動詞の項でも、この表現は直接にとり扱われておらず、わずかに aller その他が複合時制において、助動詞に estre をとったり、avoir をとったりすることがあるという指摘があるくらいのものである。(p100s)

また、Lukenheim は aller son chemin の son chemin を同族目的語 (accusatif du complément d'objet direct interne) とみている。(前掲書 p100)

これらの説明はいずれも満足すべき解決を与えているとは思われない。そこで考えられることは最初に提起した問題、すなわち、aller le chemin 型表現は

- 1) 他動詞と直接目的補語の関係か
- 2) 自動詞と状況補語の関係か

という問題の設定の仕方そのものに問題があるのではないかと云うことである。古代フランス語を用いていた人々の意識の中では、他動詞とか自動詞、あるいは直接目的補語とか状況目的補語といった範疇は確立していなかったのではないだろうか。(勿論一部の文法学者の間では、ラテン語以来種々考察されてきていたのは事実であるが、それはこの際問題外である) そして、場所の移動を表わす動詞と、その動作の展開する場所との関係は、ある場合には現代文法でいう他動詞と直接目的語の関係に近いとらわれ方をし、またある場合には副詞的に近いとらえられ方をしているようにみえるが、実際はその両方が未分化の状態のままで意識されていたのではないだろうか。古代フランス語については Blinkenberg も、場所を表わす補語は目的の観念と密接な関係に係ることを指摘している。(Le problème de la transitivité en français moderne p.198 ただし p.201 以下では aller le grand trot などの様態補語も aller son chemin と同列に扱っているが、問題があると思う) それが時代が経つとともに次第に論理化されてきたものと思われる。ラテン語の語尾変化による総合的文法手段による表現から現代フランス語の前置詞などによる分析的表現へと変ってきた変わり目には、このような過渡期があったのであろう。